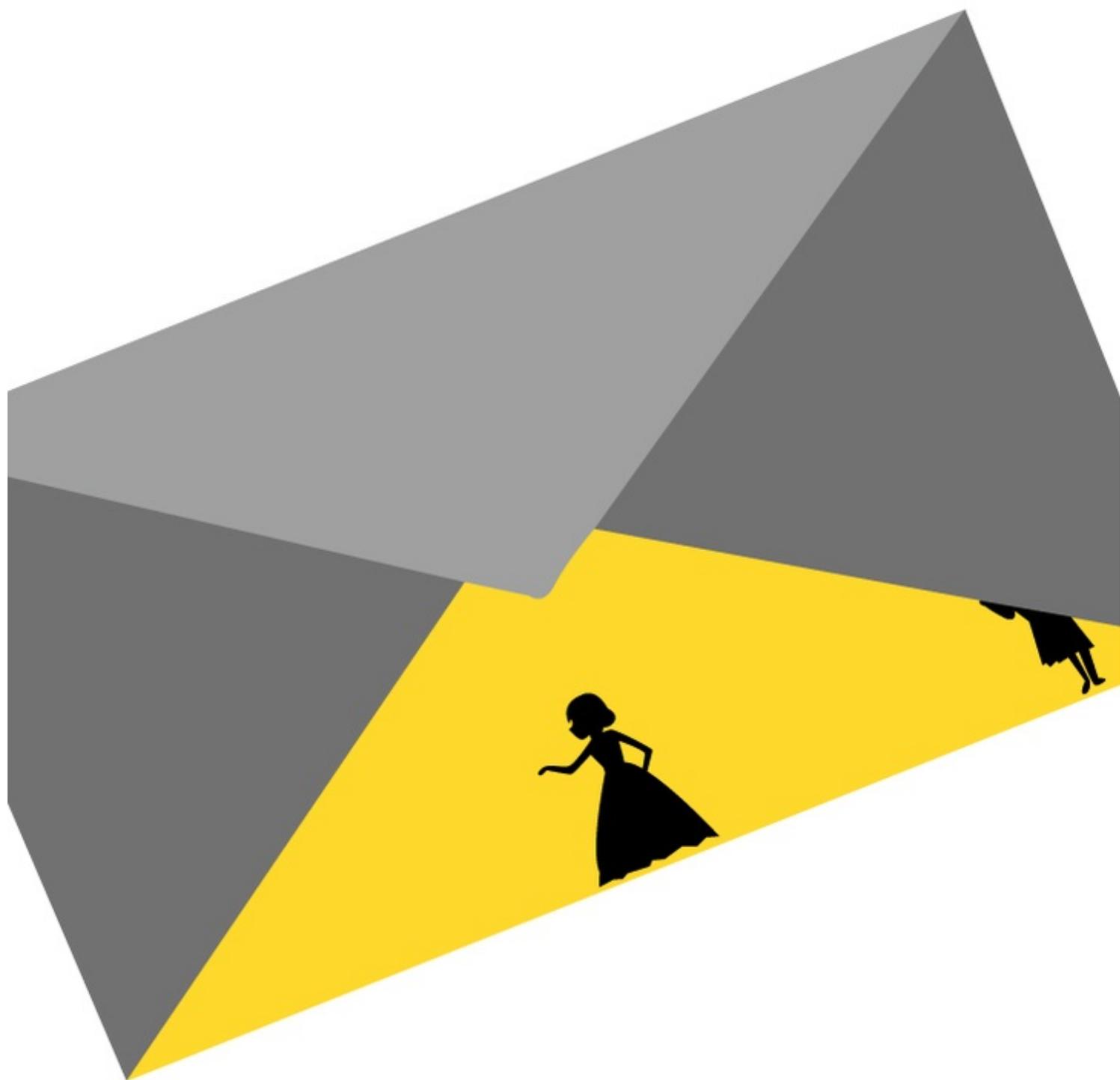


WHAT SHALL I DO?



「Oh! What Shall I do? What Shall I do?」

小さな円形ホールで、やわらかなライトを浴びた一人の少女が懸命に演じていました。特にメイクをしているわけでもなく、衣装も高校の制服の白いブラウスに紺のスカート、頭にベールを被っているだけです。それでもハムレットの死へのオフィーリアの悲しみはホールを包んでいました。光る涙をにじませて、美しい発音で演じるその人に、私は釘づけになっていました。

それは、高校二年の秋のことでした。ESSの部活動で、放課後、他校の英語劇を見に行くことになったのです。会場の北高は、私たちの学校からかなり離れていて、電車の乗り継ぎに時間がかかり、開演に間に合わず、そのホールへ足音を忍ばせて入りました。その途端、彼女の存在感にすっかり魅せられてしまったのです。

短い劇が終わり、後で行われた四校合同の懇親会で、その『オフィーリア』に名前と住所を聞き出したのです。普段の私からは想像できない暴挙でした。

《お手紙ありがとう。下級生かと思っていたら同じ二年生だったのですね》

と始まる彼女からのかわいい便箋には、美しい文字が綴られていました。早速手紙を出した返事が届いたのです。

(顔は可愛い、きれいな英語が話せる、その上字まできれいやあ！)

やわらかいピンクの封筒を胸に舞い上がった私でした。それから文通が始まりました。

《どんな花が好きですか?》

《好きな音楽は?》

《テレビやラジオ番組で何が気に入っていますか?》

彼女は子供っぽい私の質問に、ていねいに答えてくれました。

ある時、なにげなく尋ねました。

《将来の夢は?》

《この目で世界を見てまわりたいな》

その返事は、ぼーっと高校生活を過ごしていた私に突き刺さりました。

(やっぱ、私とちがうなあ。スチュワーデスになるのかな? 美人だもんなあ。それとも通訳になって世界を駆け巡るのかな?)

そう思って、また何気なく書きました。

《志望校は?》

《私は家庭の事情で進学しません》

その返事に、衝撃を受けました。彼女の高校は地域で有名な進学校で、大部分の生徒が進学していたからです。

三年生になって次第に受験のことで頭がいっぱいになってきた私は、進学の話は避けて手紙を書くことがつらくなり、少しずつ間隔が空き、そのうちに途絶えてしまいました。

大学に入学してとても仲良くなった友だちは、偶然北高出身でした。

「ねえ、谷本美紀さんて知ってる?」

そう尋ねた私を、友人は目をパチクリさせて見つめました。

「生徒会長だった人や。開校以来初めての女子の会長。学校行事なんか次々改革して行って、先生にも堂々と意見ぶつけてたんよ。『北高の女傑』って言われてて、小柄なのにバイタリティーあふれてる子だった。でも、高校違うのに何で知ってるん?そこまで有名やった?」

「いや、その一、文通してたんよ」

「えー!すごー!あの谷本さんと!熱血のすごい子やったでしょ」

「とんでもない！生徒会長だなんて全然知らなかった。ただESSの部長だと思ってただけ。字も文もきれいで憧れてたわ。やさしい人。かわいいけど、考え方はしっかりしてるなあ。いやあ、びっくりやわ」

それから三十年くらい経ちました。その友人とはたまに出会って食事したりしていたのですが、あるとき教えてくれました。

「ついこの間学年全体の同窓会があってね、あの谷本美紀さんが生徒代表で挨拶したよ。今、詩や童話書いてて本もいっぱい出版してるんやて。なんと小学校の国語の教科書にも載ったんやて」

「えー！作家さんになってはるん」

「パソコンで検索したら出てくるよ。あっ、名前今は結婚して野崎美紀さんやから」

帰宅した私は、不慣れなパソコンにかじりついて詩集や絵本や童話を注文しました。そして、ワクワクドキドキしながら届いた本を読んだのです。

それからまた十年ほど過ぎました。私は、何も成し得ず、グータラ主婦として時間を無為にやり過ごす毎日でした。そんなとき、野崎美紀さんが童話教室を開いておられることを知ったのです。私は再び暴挙に出ました。全く創作など無縁であったのに、その教室に申し込んだのです。

ビクビク初めての教室を訪れた私の前にあの谷本美紀さんがいました！私と同じ年とはとても思えない若々しい人でした。その瞳は輝きを失うどころかますますキラキラしていたのです。それから月一回の教室を楽しみに休むことなく通いました。その間、先生やお仲間のおおらかさに甘えて、童話とはとてもいえない珍妙な作品をなんとか提出していました。

ところが、三年前、突然の交通事故で通う体力がなくなってしまったのです。ただ、お仲間とまだ手紙やメールのやり取りをしています。もちろん野崎美紀先生とも。

教えていただいたことは全く身につけていませんが、これからも文を書くことは細々と続けていきたいと思っています。

このエピソードは私のとっておきのヒミツです。だって、今もあの澄んだ声が、耳に響いているのですから。『Oh! What Shall I do? What Shall I do?』